

# 平成29年度全日本少年少女武道（剣道）錬成大会

## 試合実施要領

公益財団法人 日本武道館  
一般財団法人 全日本剣道連盟

- 参加チームを大会本部において抽選により、7月22日（土）、23日（日）のいずれかに指定する。
- 試合は、指定した期日の参加チームを16試合場（8ブロック）に分け、各試合場の1位をもってブロック決勝を行い、優秀賞（1）、優良賞（1）、敢闘賞（2）を各ブロック毎に決定する。
- 審判員は、1試合につき3名とする。
- 選手の竹刀の長さは、111cm（約3.6尺）以下とする。
- 大会内容

(1) 各試合場ベスト8進出までは、下記の基本判定試合と1本勝負の2試合を行う。

(7) 試合の内容 ① 切り返し、打ち込み稽古 ② 1本勝負

(4) 基本判定試合内容の詳細

監督元立ちで、主審の合図により、先鋒の選手より下記の基本を続けて行う。

切り返し……正面打ち→前進して左右面4本、後退して左右面5本→正面打ち、以上2回繰り返す。

「剣道指導要領」参照（全日本剣道連盟発行）

打ち込み稽古……「打ち込み稽古」とは、指導者（元立ち）が与える打突の機会をとらえて打ち込んで、打突の基本的な技術を体得させる稽古の方法である。

従って、充実した気力で遠間から大技で、正しく・間合・姿勢等に留意し基本技・連続技・体当り・引き技等を繰り返し、打突させる。

「剣道指導要領」参照（全日本剣道連盟発行）

○ 時間は、切り返し・打ち込み稽古を含み40秒とする。（各コートの時計係が、計時を行う）

○ 元立ちの竹刀の長さも、選手と同じ111cm（約3.6尺）以下を使用することがのぞましい。

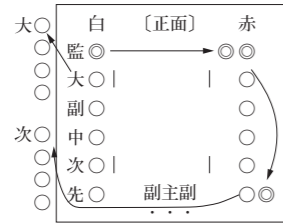
○ 切り返し終了後、引き続き打ち込み稽古に入る。（元にもどらない）

(7) 基本判定試合及び審判要領

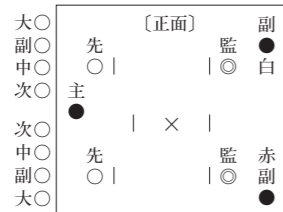
(a) 試合開始及び終了の際の相互の礼は、監督・選手全員が面、小手をつけ竹刀を持って行う。

(b) 相互の礼及び試合の体形は、試合場により下記のとおりとする。

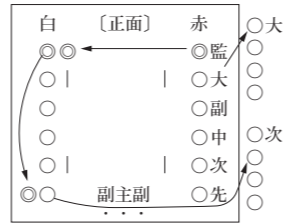
1・3・5・7・9・11・13・15 試合場の選手配置図  
礼法（試合前後）



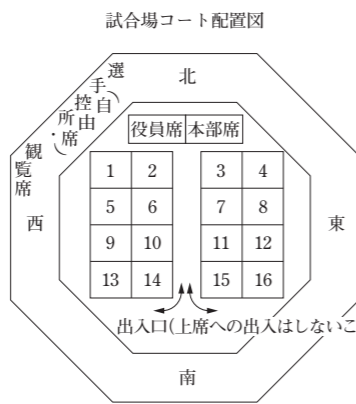
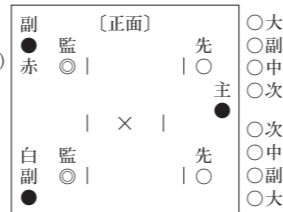
試合の体形



2・4・6・8・10・12・14・16 試合場の選手配置図  
礼法（試合前後）



試合の体形



(c) 試合の開始については、監督及び選手は立合いの位置にて立札をしたのち、開始位置にて先鋒よりそんきょう待機し、主審の「始め」の宣告により40秒間で切り返し、打ち込み稽古（元にもどらない）を続けて行う。

(d) 主審の「止め」の宣告により打ち込み稽古を終了し、判定を待つ。

(e) 勝敗は、切り返し、打ち込み稽古の総合判定とする。（判定基準は、下記のとおりとする）

(f) 審判員は、主審の「判定」の宣告で勝旗（赤・白）を上げる。

主審は勝旗を調べ、「何対何、勝負あり」と宣告する。（判定には、引き分けは認めない）

〔注：主審赤旗（白旗）、副審2名白旗（赤旗）の場合であっても、主審は旗を持ち替えずに宣告を行う〕

(7) 試合要領と勝者の決定方法

(a) 試合は、基本判定試合と1本勝負を先鋒→大将の順に引き続いて行う。

(b) 1本勝負の試合時間は1分とし、勝敗の決しない時は引き分けとする。

(c) 勝者の決定は、基本判定試合と1本勝負の勝者数、総本数の順により決定する。同数・同本数の際は、基本判定試合で勝ったチームを勝ちとする。（1本勝負での勝ち本数は、1本とする）

(例) 勝者数・総本数同数でB道場勝ちの場合(基本判定試合勝ちチームより)

団体名 A道場	監督 伊藤	先鋒 鈴木	次鋒 高橋	中堅 渡辺	副将 加藤	大将 田中	基本判定試合		総本数 勝者数	勝 敗
							本数 勝者数	本数 勝者数		
基本判定試合		1	2	1	1	1	6	3	9	×(負)
1本勝負		⊕	⊗	⊗	×	×	1	3	4	
基本判定試合		2	1	2	2	2	9	0	9	○(勝)
1本勝負							4	0	4	

(例) A道場勝ちの場合(総本数より)

団体名 A道場	監督 伊藤	先鋒 鈴木	次鋒 高橋	中堅 渡辺	副将 加藤	大将 田中	基本判定試合		総本数 勝者数	勝 敗
							本数 勝者数	本数 勝者数		
基本判定試合		1	2	3	1	1	8	3	11	○(勝)
1本勝負		⊕	⊗	⊗	⊕		2	3	5	
基本判定試合		2	1	0	2	2	7	2	9	×(負)
1本勝負							3	2	5	

(d) 各試合場ともベスト8より3本勝負とし、勝敗を決する。

(e) 当該チームが、赤・白どちらになるかは、トーナメント戦組合せの若い番号を赤とする。

(2) 各試合場ともベスト8より、試合は下記により行う。

(7) 全日本剣道連盟剣道試合・審判規則とその細則に準ずる。

(4) 試合開始の際の相互の礼は、選手全員が面、小手をつけ、竹刀を持って行う。

(7) 個人の試合は3本勝負を原則とし、試合時間は2分とする。試合時間が終了したときには、一方が1本を取った者は勝ちとし、勝敗が決しないときは引き分けとする。

(7) チームの勝敗は、勝者数、総本数により決める。同数の場合は代表者戦を行い、選手は任意とする。代表者戦は1本勝負とし、試合時間は区切らず、勝敗の決するまで行う。

(7) 倒れた者に対する打突は、有効としない。

6. 基本判定試合判定基準

(1) 総合評価の着眼点

(7) ただ速く動作ができていだけではなく、正しく、リズムや拍子をもって動作（技）をしているかを見る。

① 剣道具・剣道着・袴はかまの着装ができていのか。

② 正しい蹲踞すんこができていのか。

③ 竹刀の持ち方は正しいか。（左・右 打ち手になっているか）

④ しっかりと手首（刃筋）を返し、伸び伸びと大きな切り返しができていのか。

⑤ 切り返しや技を出すとき、左こぶしが左右に動いていないか。

⑥ 応じ技を2本以上入れているか。

⑦ その技は正しく動作しているか。

(4) 正しくひとつひとつ見るためには、下記のような留意点を観察する必要があるが、少なくとも「総合評価の着眼点」を見て判断する。

(2) 切り返しの留意点

(7) 竹刀の振り方は正しいか。

(4) 足の運びは正しいか。（退き足が歩み足にならないか）

(7) 左右面を打つ角度が、約45度になっているか。

(7) 「正面打ち」のとき、一足一刀の間合から打っているか。

(7) 竹刀の打突部で、打突部位を正しく打っているか。（元立ちは左右面を必ず竹刀で受けること）

(7) 「左右面打ち」のとき、左こぶしが正中線を通り相手の見える所まであがっているか。

(7) 「正面打ち」のとき、両腕が自然に伸び、左こぶしが中心（みぞおち）に納まっているか。

(7) 最後まで気合いと体勢が崩れないか。

(3) 打ち込み稽古の留意点

(7) 足さばきは正しいか。

(4) 技に適した足さばきができていのか。

(7) 間合取りが適切か。

(7) 技が正確（気剣体一致）であるか。

(7) 最後まで気合いと体勢が崩れないか。

(7) 残心がなされているか。

7. その他

(1) 竹刀の検査は行いませんが、各監督は選手の竹刀の点検を各試合ごとに十分行ってください。

特に、ビニールやセロテープを巻いた竹刀は使用させないでください。

(2) 各チームの監督は、当該試合終了後、試合結果をよく確認してください。（当該試合の勝敗を、確認すること）